

新訓

万葉集

下卷

佐佐木信綱編



本書は『万葉集』研究に巨歩をしるす歌人・国文学者、佐佐木信綱(1872 - 1963)が厳密な学問的手続きによって難解きわまりない原典を漢字

仮名まじり、振仮名つきの表記に改めたもの。これによって『万葉集』はだれにでも親しめるものとなった。下卷には巻11～20を収録。東歌が巻14に、防人歌が巻20に集められている。



黄 5-2
岩波文庫

秦 恒平 (はた こうへい)

1935年京都市生まれ。1958年同志社大学文学部卒。1969年小説

『清経入水』により第5回太宰治賞を受ける。

現在 作家・東京工業大学教授

専攻 小説・日本文化論

小説 『みごもりの湖』(新潮社)、『冬祭り』(講談社)、『北の時代』、『親指のマリア』、『慈子』、『修羅』(以上、筑摩書房)、『墨牡丹』(集英社)、『閨秀』(中央公論社)他。

評論 『谷崎潤一郎』、『花と風』、『からだ言葉の本』(以上、筑摩書房)、『中世と中世人』、『一文字日本史』(以上、平凡社)、『女文化の終焉』(美術出版社)、『趣向と自然』(古川書房)、『梁塵秘抄』、『閑吟集』(以上、日本放送出版協会)他。
他に 私版「秦恒平・湖(うみ)の本」シリーズを継続刊行中。

名作の戯れ——「春琴抄」「こころ」の真実

一九九三年四月十日 第一刷発行

著者——秦 恒平

発行者——株式会社三省堂代表者守屋眞明

発行所——株式会社三省堂

101 東京都千代田区三崎町二一三二一四

電話 編集(〇三)三三三〇九四一一

販売(〇三)三三三〇九四一一

振替口座 東京六一五四三〇〇〇

乱丁・落丁本はお取替えいたしません

© K.Hata 1993 Printed in Japan

ISBN4-385-35484-7

岩 波 文 庫

30-005-2

新 訂

新 訓 万 葉 集

下 卷

佐佐木信綱編

岩 波 書 店

新訂新訓萬葉集下卷 目次

萬葉集

卷十一	五
卷十二	四
卷十三	七
卷十四	二
卷十五	三
卷十六	九
卷十七	九
卷十八	七
卷十九	七
卷二十	七
奥書	四

萬葉集卷第十一

三 古今相聞往來の歌の類の上

旋頭歌十七首 (三三五—三六七)

正に心緒を述ぶる歌百四十九首 (三三六—四一四、二五二—二六八)

物に寄せて思を陳ぶる歌二百八十二首 (二四二—二五七、二六一—二八七)

問答歌二十九首 (二五八—二六、二六〇—二七)

譬喩歌十三首 (二八六—四〇)

二百八十二首
〔代〕三百二

(二) 旋頭歌

新室の壁草刈りにいまし給はね草のごと依り合ふをとめは君がまにまに
 新室を踏み鎮め子し手玉鳴らすも玉のごと照らせる君を内にと白せ
 長谷の齋槻が下にわが隠せる妻茜さし照れる月夜に人見てむかも
 健男の思ひ亂れて隠せるその妻天地に徹り照るとも顯はれぬやも
 恵しとわが思ふ妹は早も死なぬか生けりとも吾に依るべしと人の言はなくに
 高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける明日の夜し來むとし言はば取り置き待たむ
 朝戸出の君が足結をぬらす露原早く起き出でつつ吾も裳裾ぬらさな
 何せむに命をもとな永くほりせむ生けりともわが思ふ妹に易くあはなくに
 息の緒に吾は思へど人目多みこそ吹く風にあらばしばあふべきものを
 人の親の處女兒居多て守る山べから朝なきな通ひし君が來ねば哀しも
 天なる一つ棚橋いかにか行かむ若草の妻がりといはば足莊嚴せむ
 山城の久世の若子がほしといふ余をあふさわに吾をほしといふ山城の久世

右の十二首は、柿本朝臣人麻呂の歌集に出でたり。

しづめ或しづの、しづむ齋槻或弓槻もと或したつうはし或うつくし、めぐ死なぬか或死ねやも來むとし或きなむとすぬらさぬ或ものすそ來ねば哀しも或來ぬが哀し妻がり以下或妻がいへらく足よそひせよ或妻がりといへばあゆひよそはむ、足をかざらむほしといふ或ほりすとふ、余を或われ、吾を或あを

二二六三

岡ざきのたみたる道を人な通ひそ在りつつも君が來まさむ避道にせむ

二二六四

玉垂の小簾の隙に入り通ひ來ねたらちねの母が問はさば風と申さむ

二二六五

うち日さす宮道にあひし人妻ゆゑに玉の緒の思ひ亂れて寝る夜しぞ多き

二二六六

まそ鏡見しかと思ふ妹もあはぬかも玉の緒の絶えたる戀の繁きこのころ

二二六七

海原の路に乗りてやわが戀ひをらむ大船のゆたにあるらむ人の見ゆゑに

(四)

右の五首は、古歌集の中に出でたり。

正に心緒を述ぶ

二二六八

たらちねの母が手放れかくばかり術なき事はいまだせなくに

二二六九

人の寐る味寐は寝ずてはしきやし君が目すらを欲し嘆かふ或本の歌に云く、君を思ふに明けにけるかも

二二七〇

戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉ほこの路行人の言も告げなく

二二七一

心には千たび思へど人にいはぬわが戀妻を見むよしもがも

二二七二

かくばかり戀ひむものとし知らませば遠く見るべくありけるものを

二二七三

いつはししも戀ひぬ時とはあらねども夕片設けて戀は術なし

二二七四

かくのみし戀ひや渡らむたまきはる命も知らず歳は經につつ

妹も或妹に
このころ「比
者」(嘉)「此
者」
のりてや或の
れれや嘆かふ或嘆く
も嘆かく
告げなく「告
無」(嘉)「告
兼」みるべく或み
つべく
戀は術なし或
戀ふる術なき
歳は或歳を

二三七五 吾われゆ後生れむ人はわがごとく戀する道にあひこすなゆめ

二三七六 ますらをの現うつらし心も吾は無し夜晝よるひるといはず戀ひしわたれば

二三七七 何せむに命いのち繼つぎけむ吾妹子に戀ひざる前に死なましものを

二三七八 よしゑやし來きまされぬ君を何せむに厭いとはず吾は戀ひつつをらむ

二三七九 見わたせば近きわたりをたもとほり今や來きますと戀ひつつぞをる

二三八〇 是こゝしきやし誰たが障さふれかも玉ほこの路みち見忘れて君が來きまさぬ

二三八一 君が目の見まくほしけくこの二夜千歳のごともわは戀ふるかも

二三八二 うち日さす宮道みやぢを人は満みち行けどわが思ふ君はただ一人のみ

二三八三 世の申し常かくのみとおもへども半手かたて忘れずなほ戀ひにけり

二三八四 吾背子は幸さいく坐いすと歸り來て吾に告げ來む人も來ぬかも

二三八五 あらたまの五年經れどわが戀の跡無き戀は止やまず怪あやしも

二三八六 いはほすら行き通とほるべきますらをも戀とふ事は後悔いにけり

二三八七 日暮れなば人知りぬべし今日けふの日は千歳のごともありこせぬかも

二三八八 立ちてゐてたどきも知らず思へども妹に告げねば間使まつかひも來ず

二三八九 ぬばたまのこの夜な明けそあからひく朝行く君を待たば苦しも

命いのちつぎけむ或
命はつがむ
こひざる或
ひせぬ
見渡せば或見
渡しの

わが或あは、
世の中し或世
の中は、世の
中の常のごと
しと
半手以下或は
た忘れずて
いますと以下
或いまして歸
りこむと
跡なき戀は或
跡なき戀の
止まず怪しも
或止まず怪し
き
日暮れなば或
日ならべば或
今日の日は或
今日の日は、
今日の日は

二三九〇 戀するに死するものにあらませばわが身は千たび死にかへらまし

二三九一 玉ゆらに昨日の夕べ見しものを今日の朝に戀ふべきものか

二三九二 なかなかに見ざりしよりは相見てし戀しき心まして思ほゆ

二三九三 玉ほこの道行かずしてあらませばねもころかかる戀にあはざらむ

二三九四 朝影にわが身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし子ゆゑに

二三九五 行けど行けどあはぬ妹ゆゑひさかたの天の露霜にぬれにけるかも

二三九六 たまさかにわが見し人をいかならむ縁をもちてかまた一目見む

二三九七 しましくも見ねば戀しき吾妹子を日に日に來れば言の繁けく

二三九八 年きはる世まで定めてたのめたる君によりてし言の繁けく

二三九九 朱らひく膚にも觸れず寝たれども心を異しくわが思はなくに

二四〇〇 いでいかにここだはなはだ利心の失するまで思ふ戀ふらくのゆゑ

二四〇一 戀ひ死なば戀ひも死ねとや吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ

二四〇二 妹があたり遠く見ゆればあやしくも吾はぞ戀ふる逢ふ由を無み

二四〇三 玉久世の清き河原に身被して齋ふいのちは妹がためこそ

二四〇四 思ひ依り見依りにものはありなむを一日のほども忘れて思へや

玉ゆらに、或たまさかに、たま

またまゝ、相見

ては、或相

戀にあはざら

む、或戀にはあ

はじ

ゆけどゆけど

と、ゆきゆき

と

くれは以下き

なば言ししげ

けむ

世まで以下或

めたのみ

死ねとや或死

ねとか

ためこそ或た

めなり

ありなむを或

あるものを

二四〇五 垣穂なす人はいへども高麗錦紐解きあけし君ならなくに

二四〇六 高麗錦紐解きあけて夕べとも知らざる命戀ひつつかあらむ

二四〇七 百積の船こぎ入るる八占指し母は問ふともその名は告らじ

二四〇八 眉根かき鼻ひ紐解け待つらむかいつかも見むと思へる吾を

二四〇九 君に戀ひうらぶれをれば悔しくもわが下紐の結ふ手いたづらに

二四一〇 あらたまの年は果つれどしきたへの袖交へし子を忘れて思へや

二四一一 白たへの袖はつはつに見しからにかかる戀をも吾はするかも

二四一二 吾妹子に戀ひて術なみ夢見むと吾は思へど寐ねらえなくに

二四一三 故もなくわが下紐を解けしめつ人にな知らせただにあふまでに

二四一四 戀ふることなくさめかねて出で行けば山も川をも知らず來にけり

物に寄せて思を陳ぶ

二四一五 處女らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり吾は

二四一六 ちはやぶる神の持たせる命をも誰がためにかは長くほりせむ

二四一七 いそのかみ布留の神杉神さびし戀をも吾は更にするかも

いへども或いふとも君ならなくに或君ならなくに

夕べとも或夕べをも、夕べだに

いつかも或いつしか

思へる吾を「念吾君」

袖はつはつに或袖をはつかに

すべなみ「無乏」(嘉)「無之」

なぐさめかねて或ころやりかね

山も川をも或山をも川も

神さびし或神さびて

集

葉

萬

二四四八

ぬば玉の間あけつつ貫ける緒もくくりよすれば後あふものを

二四四九

香具山に雲ゐたなびきおほほしく相見し子らを後戀ひむかも

二四五〇

雲間よりさ渡る月のおほほしく相見し子らを見むよしもがも

二四五二

天雲の依り合ひ遠みあはずとも異手枕を吾まかめやも

二四五三

雲だにも著くしたたば意遣り見つつもをらむただにあふまでに

二四五四

春柳葛城山にたつ雲の立ちてもゐても妹をしぞ思ふ

二四五五

春日山雲ゐがくりて遠けども家は思はず君をしぞ思ふ

二四五六

わがゆゑにいはいはれし妹は高山の峯の朝霧過ぎにけむかも

二四五七

ぬばたまの黒髪山の山草に小雨ふりしきしくしく思ほゆ

二四五八

大野に小雨ふりしく木の下に時と依り來ねわが思ふ人

二五五九

朝霜の消なば消ぬべく思ひつついかこの夜を明しなむかも

二五六〇

吾背子が濱行く風のいや急に急事益してあはずかもあらむ

二五六一

遠妹のふりさけ見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたなびき

二五六二

山のはにさし出づる月のはつはつに妹をぞ見つる戀しきまでに

二五六三

吾妹子し吾を思はばまそ鏡照り出づる月の影に見え來ね

あはずとも或
あはねども
見つつもをら
む「見乍居」
（考）見つつも
爲「見乍
爲」わがゆゑに或
われゆゑに
いはれ或いは
え
山すげ或山く
さ
大野に或大野
なる
こね或こよさしいづ「進
出」(文)「追

二四三三 水の上に數書くごときわが命を妹にあはむとうけひつるかも

二四三四 荒磯越え外ゆく波の外ごころ吾は思はじ戀ひて死ぬとも

二四三五 淡海の海おきつ白波知らねども妹がりといはば七日越え來む

二四三六 大船の香取の海に錨おろしいかなる人か物おもはざらむ

二四三七 沖つ藻を隠さふ波の五百重波千重しくしくに戀ひわたるかも

二四三八 人言は暫しぞ吾妹繩手引く海ゆ益りて深くし思ふを

二四三九 淡海の海おきつ島山奥まけてわが思ふ妹が言の繁けく

二四四〇 近江の海おきこぐ船に錨おろし藏めて君が言待つ吾ぞ

二四四一 隠沼の下ゆ戀ふればすべをなみ妹が名告りつ忌むべきものを

二四四二 大地も採り盡さめど世の中の盡しえぬものは戀にしありけり

二四四三 隠處の澤泉なる石根をも通して思ふわが戀ふらくは

二四四四 白檀弓石邊の山のときはなる命なれやも戀ひつつをらむ

二四四五 淡海の海沈く白玉知らずして戀せしよりは今こそ益れ

二四四六 白玉を纏きてぞ持てる今よりはわが玉にせむ知れる時だに

二四四七 白玉を手に纏きしより忘れじと思ひしことはいつかをはらむ

いはば以下いへば七日こえきぬ

深くし思ふを或深くしぞ思ふ

いむべき或ゆゆしき世の中或世の中にいはねをも以下或いはねゆもとほりて思ふ

今こそ「今」(類)「令」今(類)「令」

二四七六 あきがしは潤和川べのしののめの人にはしのび君に堪へなく

二四七九 さねかづら後もあはむと夢のみにうけひぞわたる年は經につつ

二四八〇 路のべのいちしの花のいちしろく人皆知りぬわが戀妻は或本の歌に曰く、いちしろく人知りにけりつぎてし思へば

二四八一 大野にたどきも知らず標繩結ひて在りもかねつつわがかへり見し

二四八二 水底に生ふる玉藻のうちなびき心は寄りて戀ふるこのころ

二四八三 しきたへの衣手離れて玉藻なすなびきか寝らむ吾を待ちかてに

二四八四 君來ずは形見にせむとわが二人植ゑし松の木君を待ち出でむ

二四八五 袖振りて見ゆべきかぎり吾はあれどその松が枝に隠りたりけり

二四八六 血沼の海の濱邊の小松根深めて吾戀ひわたる人の子ゆゑに

或本の歌に曰く

血沼の海の潮干の小松ねもころに戀ひやわたらむ人の兒ゆゑに

二四八七 奈良山の小松が末のうれむぞはわが思ふ妹にあはず止みなむ

二四八八 磯の上に立てるむろのき心いたく何に深めて思ひ始めけむ

二四八九 橋の下に吾を立て下枝取り成らむや君と問ひし子らはも

二四九〇 天雲に翼うちつけて飛ぶたづのたづたづしかも君いまさねば

人にはしのび
れ人しのお
しのび或いは
じ、あはじ

ありもかねつ
つ以下或あり
かつまじじわ
がこふらくは
このころ「比
日」(嘉)「此

袖ふりて以下
或袖ふるが見
るべきかぎり
袖ふりて或袖
らばを袖ふ
われこひわた
わればこひ
わたる

へに或うへに
わをたて或わ
れたち、われ
たれば
君いまさねば
或君いまさね

二四六三

ひさかたの天光る月の隠りなば何になぞへて妹をしのはむ

二四六四

若月の清にも見えす雲隠り見まくぞほしきうたてこのころ

二四六五

吾背子にわが戀ひをればわが宿の草さへ思ひうらぶれにけり

二四六六

浅茅原小野に標繩結ふ空言をいかなりといひて君をし待たむ

二四六七

路のべの草深百合の後にとふ妹がいのちを吾知らめやも

二四六八

潮章に交れる草の知草の人みな知りぬわが下思は

二四六九

山ぢさの白露おもみうらぶれて心に深くわが戀止まず

二四七〇

潮にさね延ふ小菅しのびずて君に戀ひつつ在りかてぬかも

二四七一

山城の泉の小菅おしなみに妹が心をわが思はなくに

二四七二

見渡しの三室の山の石穂菅ねもころ吾は片思ぞする一云、三諸の山の石小菅

二四七三

菅の根のねもころ君が結びてしわが紐の緒は解く人あらじ

二四七四

山菅の亂れ戀のみせしめつつあはぬ妹かも年は經につつ

二四七五

わが宿の軒のしだ草生ひたれど戀忘れ草見るにいまだ生ひず

二四七六

打ちし田に稗はあまたにありといへど擇らえし吾ぞ夜ひとり宿る

二四七七

あしひきの名におふ山菅おしふせて君し結ばばあはざらめやも

さやにも或さ
やかに下もひは或下
おもひ
おもみ或しげ
み
うらぶれて以
下或うらぶる
る心も深く
しのびずて或
ぬすまはず紐のをは以下
或ひものをを
とく人はあら
じ
わがやどの或
わがやどは
おひたれど或
おふれども
見るに或見れ
夜或夜を